

第3回CSJ化学フェスタ開催報告

はじめに

日本化学会の秋季事業「第3回CSJ化学フェスタ」が10月21日（月）～23日（水）の3日間、東京・江戸川区のタワーホール船堀で開催された。「シェール革命—化学産業への期待と影響」、 「新学術領域研究が目指す未来の化学」、 「飛躍する女性研究者を目指して」など社会が抱える喫緊のテーマや新しい視点のテーマなど魅力ある企画を多数用意した。参加者は産学官から2200名を超え、CSJ化学フェスタの目的である「産学官の交流深耕」「化学の社会への発信」を実現することができた。一方、新たな宿題も抽出できた。今後の企画、運営に反映させていくことによって、CSJ化学フェスタをさらに進化させていきたいと考えている。

産学官で強力な実行委員会体制を構築

CSJ化学フェスタは日本化学会の秋季事業として、春季年会とは異なる新たな視点で実施することを命題としてスタートした。「産学官の交流深耕」「化学の社会への発信」を目的に、産学官の関心が



高いテーマ、社会が抱えている問題・課



題について最新の話題を提供し論議する「テーマ企画」、企業、大学、研究機関の戦略、考え方、成果について直接聞くことができる「産学官 R&D 紹介企画」（ブースとオーラルセッション）、全国大学・高等専門学校学生等の研究発表「学生ポスター」、化学と科学に関連する研究機関、団体がアクティビティ、情報を発信する「場」として活用、新たな連携を推進することを目的とした「コラボレーション企画」、世界一早いノーベル化学賞解説講演などの「公開企画」などで構成されている。

第1回は早稲田大学、第2回東京工業大学と大学を会場として開催したが、今回初めて公的機関であるタワーホール船堀で開催した。会場数が多く確保できる一方、運営面で課題があったが、産学官さらに支部からのメンバーによる強力な実行委員会を編成することによって、企画の大幅な充実、運営体制の強化を図ることができた。

春季年会とは趣を異にする秋季事業として定着

テーマ企画

テーマ企画ではシェールガス、国産資源開発などの我が国が直面する課題から



創薬化学、自動車材料、有機系太陽電池、スマートフォン、OLED、エレクトロニクス、ナノ機能など話題を絞ったテーマ、さらに感性研究、世界に打ち勝つビジネス戦略、女性研究者の交流拡大など視点を変えたテーマで講演・パネルディスカッションが開催された。さらに「技術革新の種を撒く」では新学術領域研究の化学系19領域の代表者が一堂に集まり、現状と将来展望について討議した。

満席になる会場も相次いだ。一方、「聞きたい講演が重なった」などの意見もあり、プログラム編成や企画の絞り方を今後工夫する必要がある。

産学官 R&D 紹介企画と学生ポスター

産学官 R&D 紹介企画には33企業及び東京工業大学、日本原子力研究開発機構がブースとセッションに参加した。同一会場で行われた学生ポスターは昨年の666件を大幅に上回る943件の発表が行われた。北海道、九州、中国・四国、近畿からの発表者が大幅に増大するとともに、高等専門学校からの参加もあり、裾野が大きく広がった。

また学生ポスターに参加した学生を中心に産学官の参加者がR&D紹介ブースを訪ずれ、熱心に意見交換している姿がいたるところで見られ、企画が目的に合



致し、十二分に達成されていると感じた。「産学官 R&D 紹介企画」(前回まで企業 R&D 紹介企画)は今回から名称を変更し、産以外からの参加を推進するよう企画したが、残念ながら少数の参加にとどまった。今後、学官からの参加をお願いしたい。

コラボレーション企画

第3回の今回は前回の3機関・団体から日本化学工業協会、科学技術振興機構、理化学研究所、産業技術総合研究所、新化学技術推進協会、日本原子力研究開発機構の6機関・団体に拡大した。今後さらに参画する機関・団体、企業を広げていくためには、広報・周知徹底などについて実施機関・団体との情報交換、連携、協力を進めていきたい。

公開企画

「世界一早いノーベル化学賞解説講演」は公開企画の目玉として定着した。今回も大峯巖分子科学研究所長、高田彰二京都大学教授が受賞の原点となった研究がいかに行われたか、それを契機に研究の大きな流れがいかに作られたかなどにつ



いて講演があり、好評を博した。また「化学と酒」「化学と鉄道」の企画も化学の社会への貢献、発信の意義が大きい企画であった。今後も発信力を高める企画を立案・実行していきたい。

産学官の力を結集

第3回 CSJ 化学フェスタの全参加者は2227名(昨年1687名)に達し、目標の2000名を上回ることができた。特に参加登録者(学生ポスター登壇者を除く)の割合は「産」:「学」=3:2で、産が初めて学の数を上回り、ポスター発表者数を含む全参加者でも産の割合は31%と春季年会に比較して3倍以上であった。また官(国公立研究機関を含む)の参加者も大きく増加、春季年会とは異なる



る参加者構造が明らかとなった。

「産学官の交流深耕」「化学の社会への発信」という目的を産学官の力を結集して実現できたことは大きな成果である。会期中に他学会の企画担当責任者の方が本部を訪れられ、「CSJ 化学フェスタは素晴らしい。なぜこのようなイベントができたのか、どのようにして実施されているのか教えて欲しい」と尋ねられた。非常に象徴的な質問であり、企画したもものとして誇りを持たせていただくとともに、逆に強い責任も感じさせられた。次回以降も「産学官の交流深耕」という化学フェスタの開催趣旨の原点に立ち返り、いつも新しい目でCSJ 化学フェスタを企画していきたい。



次回、第4回 CSJ 化学フェスタは2014年10月14日～16日の3日間、今年と同じ会場となるタワーホール船堀で行う。

(CSJ 化学フェスタ実行委員長 加藤隆史(東京大学)・多田啓司(旭化成))

© 2013 The Chemical Society of Japan